

浦久保義信 《水郷》

破天荒な画家の穏やかな日

私は宇佐美承氏の有名な著作『池袋モンパルナス』の数多くいる主人公の一人と認識している。ところが、各地で行われた、「池袋モンパルナス」展に浦久保の絵が展示された様子がない。宇佐美氏によると落ち着いた居場所がなく、「暴れん坊」「女好き」「礼儀を知らないこと」が災いしたのだろうというイメージだ。

ところがこの作品を見て驚いた。このような穏やかな時期があつたのか？ 独立展出品作のリストになく、いつの作品か全く見当がつかない。宇佐美氏によると長い晩年の面倒を見てくれた女性がいた。その人と一緒に「水郷」に行ったのだろうか？ よく見ると穏やかだが風が強く感じる。浦久保の生涯を象徴するような強風だ。

だが、強風のなかにあつても、まわりは迷惑だつただろうが、浦久保にとってその人生は、好きな事を思う存分して、満足できたものであつたのだろう。

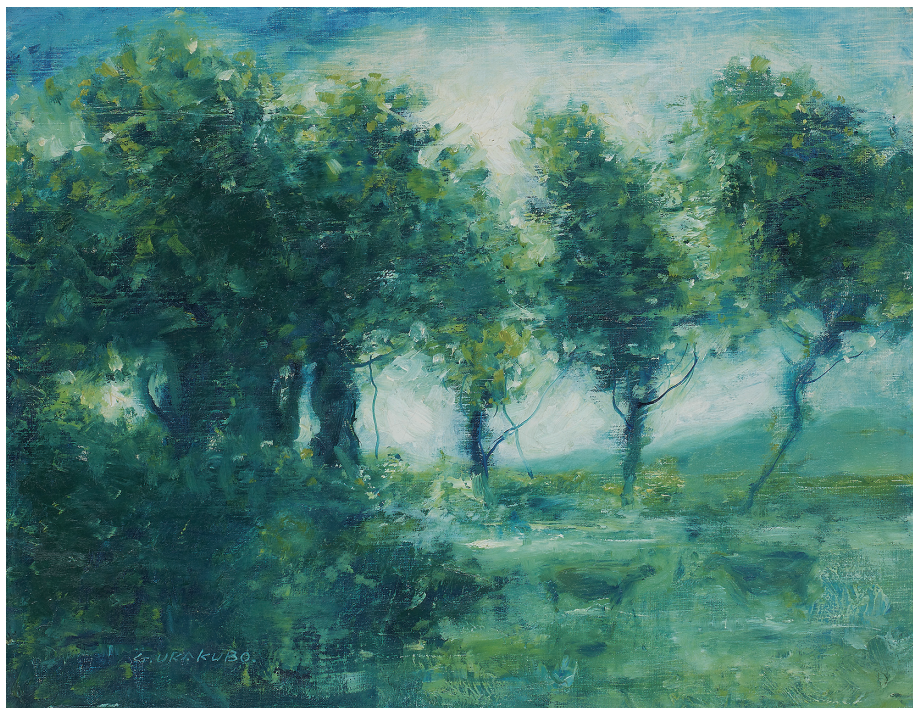
戦前に「着流しで強風の中を飄々と歩いていく」そのようなイメージが私の中にはあるのだ。

小山美枝（東京都西多摩郡瑞穂町）

浦久保義信 《水郷》

油彩・キャンバス 32.5 × 41.0cm 制作年不詳

Urakubo Yoshinobu A Riverside District



浦久保義信（うらくぼ・よしのぶ／1903 - 1988年）

奈良市生れ。渡英、滞仏。1923年帰国。三岸好太郎らに評価され、春陽会、二科展に出品。32年より独立展に出品。35年独立賞。47年行動美術会会員に推挙。88年没、85歳。

小島善太郎 《新緑の道》

柔らかな光を描き続けた画家

私が、小島善太郎の作品をずっと入手したがっていたのを知っていたHさんから連絡をいただいて入手した作品である。

小島の作品を偶然、青梅市立小島善太郎美術館で見たことが私の絵好きになるきっかけになったことはあちこちに言っていることではあるが、その作品は《柔らかな光》という。

この作品はいつ頃のものはわからないが、やはり「光」を宿している。小島の作品は晩年になるほどに光があふれてくる気がしている。この作品はその過渡期にあるようだ。

ずっと行ってみたかった小島のアトリエが一般公開されている日野市立小島善太郎記念館「百草画荘」を訪れた。晩年の作品が多くあった、明るい！そして《二七歳の自画像》の光と影。

小熊秀雄が「マンネリズム」と小島を叩いている文章を見たが、それがなんだというのだろうか？ 貧困の中で生まれ育ち、一八歳で陸軍大将中村覚の書生となって絵を本格的に学び始めた小島はずっと「光」を描き続けた。それを「マンネリズム」と一喝した小熊は早世したため、小島の一生をかけた「光」の作品を見ていないのである。小島の描き続けた「光」が、私は本当に好きなのだと思付いたのだ。この《新緑の道》もその系譜につながるのではないか？

「百草画荘」にしていると、不思議な感覚に陥る。なんだか空気が違う。小島が私を迎えてくれているような、そんな気がした。また訪ねて、小島と同じ空気の中にいよう。それが私の幸せにもなるのだから。

小山美枝（東京都西多摩郡瑞穂町）

小島善太郎 《新緑の道》

油彩・キャンバス 38.0 × 46.0cm 制作年不詳

Kojima Zentaro A Road Surrounded by Fresh Greenery



小島善太郎（こじま・ぜんたろう／1892－1984年）

東京生れ。1910年絵を本格的に学び始める。安井曾太郎に師事。22－25年渡仏。23年サロン・ドートンヌ入選。26年「一九三〇年協会」創立。27年二科賞。30年「独立美術協会」創立。東京日野市で没、91歳。

オノサト・トシノブ 《サークル69-E》

多様な円と輝く色彩が奏でる美しい抽象世界

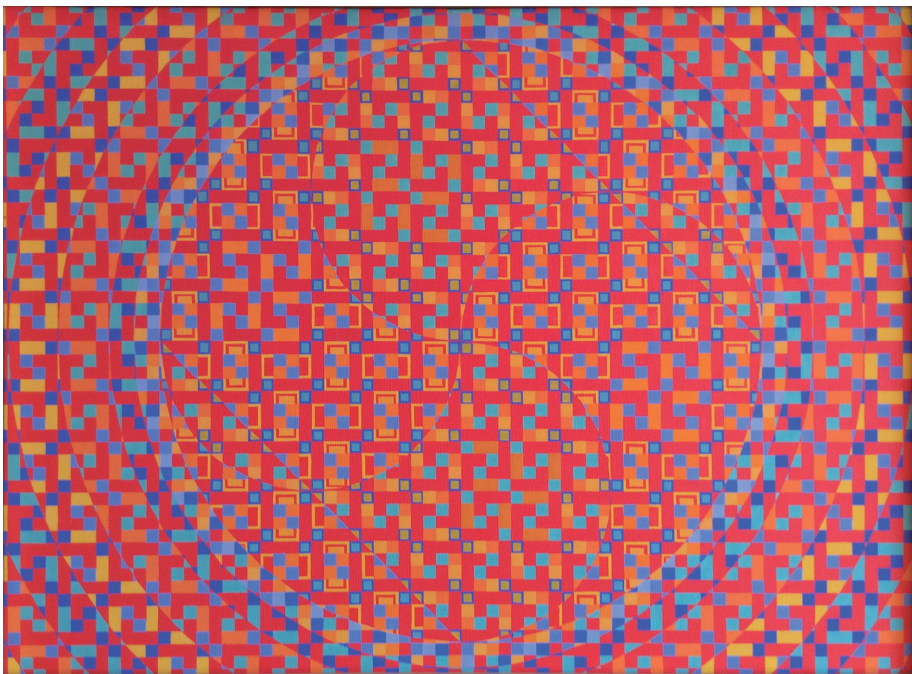
この作品は当時、地元のコレクターN氏が南画廊でのオノサト展で同じサイズの作品を二点購入され、その折、我が家にすすめられた一点である。当時、大学生だった私がその作品と接し、色彩のすばらしさとともに絵のもつ深さに心が動いたこともあり、母に購入を薦め、我が家に来てきた。当時、三〇万円と記憶している。アートフル勝山の会で「オノサト・トシノブ展」を開催した際（一九八一年）、この作品と対面したオノサト先生から「ひさしぶりに旧作と対面しました。おもてなしありがとう」と書かれた直筆の絵葉書をいただいた。懐かしい思い出である。N氏のコレクションには瑛九の油彩、駒井哲郎のカラー銅版画そして池田満寿夫の初期シヨンの運命は分からない。コレクションは預かりものであり、次の世代にうまく手渡すことができれば、これ以上の幸せはないと考えるべきと思っている。

荒井由泰（福井県勝山市）

オノサト・トシノブ 《サークル69-E》

油彩・キャンバス 53.0 × 73.0cm 1969年

Onosato Toshinobu Circle 69-E



オノサト・トシノブ（おのさと・としのぶ／1912 - 1986年）

長野県飯田生まれ。現代美術作家。1931年津田清楓に学ぶ。37年自由美術家協会結成、会友として参加。63年日本国際美術展で最優秀賞。64、66年ベニス・ビエンナーレに日本代表として出品。戦前戦後を通じ前衛美術の道歩んだ。桐生で没、74歳。

恩地孝四郎 《失題》 (室生犀星著『青い猿』の挿絵より)

幻想の世界に引き込む不思議な作品

この作品は室生犀星著の『青い猿』の挿画に使用された作品の一つである。二〇〇三年に海外に恩地の作品がないかネットで探していたところ、偶然ヒットした作品で、米国のFギャラリーが持っていた。来歴はサザビーズのオークションでのJUDAコレクションからであった。その時はコップが描かれていたからか、『At the Bar (バーに上)』とのタイトルがついていた。二人の人物像、鱗のついた魚、三個のコップが描かれたシュールで不思議な作品だ。後に同じ『青い猿』の挿画に使われた三人の奇妙な人物が描かれている自摺作品も手に入れた。両方ともモノクロ木版ではあるが、二版以上使用しているようで深みがある。これらの作品は具象と抽象の中間に位置した作品で結構気に入っている。彼の自摺作品は専門家摺りである平井摺りや米田摺りの作品と比較すると汚れ等を気にせず、勢いがある。出品作品は来歴に加え、和歌山県立近代美術館が所蔵する作品と見比べてみても見劣りがしないことから、恩地自摺の作品と確信している。

荒井由泰 (福井県勝山市)

恩地孝四郎 《失題》 (室生犀星著『青い猿』の挿絵より)

木版 (自摺)・紙 20.6 × 14.3cm 1931年

Onchi Koshiro *Lost Title* (from the illustrated book "The Blue Monkey" by Muro Saisei)



恩地孝四郎 (おんち・こうしろう / 1891 - 1955年)

東京生れ。版画家・装幀家・詩人。1910年東京美術学校入学。14年藤森静雄、田中恭吉と同人誌『月映』を刊行。31年日本版画協会の創立に参加。51年第1回サンパウロ・ビエンナーレに出品。53年岡本太郎らとアートクラブ結成。東京で没、63歳。

恩地孝四郎 《壺》

壺？ どう見ても抽象作品です！

《壺》というタイトルがついているが、私には抽象作品に見える。神田の版画堂さんでこの作品に出会い、即座に購入を決めた。「一九二九年（昭和四年）にこの作品」と驚くとともに、色合い・形が私の琴線に触れた。調べてみると、第九回日本創作版画協会展（一九二九年）の出品作で、版画誌『風』の読者のために、二〇部限定で頒布した自摺作品であることが判明した。（実際は出品作と若干デザインが異なっているが）一九二八年に代表作の一つでヌードと白い布が美しい《裸膚白布》という有名な作品を発表しているが、その白と壺の白の部分が同じマチエール（胡粉という貝殻から作られた顔料で摺られたようだ）なのにも、惹かれた。恩地孝四郎の研究者である桑原規子先生によれば、彼が本当にやりたかったのは抽象表現であったが、版画の愛好家の多くが具象作品を求めていることもあって、版画の普及という使命を持っていた恩地はあえて一般向けに具象版画にも取り組んだようだ。二つの顔を使い分けた訳である。戦後は吹っ切れて「抽象表現」の追求にまい進した。日本でいち早く抽象表現に取り組んだ「美の先達」に心からの敬意を表したい。

荒井由泰（福井県勝山市）

恩地孝四郎 《壺》

木版（自摺）・紙 21.0×15.0cm 1929年

Onchi Koshiro Vase



恩地孝四郎（おんち・こうしろう／1891－1955年）

東京生れ。版画家・装幀家・詩人。1910年東京美術学校入学。14年藤森静雄、田中恭吉と同人誌『月映』を刊行。31年日本版画協会の創立に参加。51年第1回サンパウロ・ビエンナーレに出品。53年岡本太郎らとアートクラブ結成。東京で没、63歳。

恩地孝四郎 《リリック No.9 はるかな希い》

版画の概念を打ち壊す独自の技法で制作された抽象作品

昭和一四（一九三九）年ごろ恩地孝四郎の弟子たちが「一木会」なるものを作った。弟子たちがたびたび恩地邸を訪ねるのは先生の仕事の邪魔になるということで毎月第一木曜日の午後版画研究会を行い、集うことになった。一木会の作家たちが戦時下、作品も売れないことから版画家の関野準一郎の提案で作品交換会をやるうということで一九四四年に『一木集（I）』が世に出た。さすがに、終戦の年はスキップしたが、一九五〇年まで毎年交換会が続けられた。この作品は一九五〇年に最後となった『一木集VI』に収められた作品である。参加作家は二名なので、限定二部と考えられる。伝統的な木版画でなく、段ボールを勾玉のような形や円形に切ったものにインクを塗り、さらに左の上には「ひも」に色を付けたものをバレンで紙に刷り上げ、作品に仕上げている。この恩地独自の実験的技法をマルチブロックと称している。大英博物館等、同作品が美術館に所蔵されているが、微妙に位置がちがっているのが面白い。小品ではあるが伝統にとらわれず、常にチャレンジを続けていた恩地の真骨頂ともいべき抽象表現の名品だと思う。

荒井由泰（福井県勝山市）

恩地孝四郎 《リリック No.9 はるかな希い》
木版、マルチブロック（自摺）・紙 36.6 × 27.2cm 1950年
Onchi Koshiro Lyric No. 9 - Strong Desire



恩地孝四郎（おんち・こうしろう／1891 - 1955年）

東京生れ。版画家・装幀家・詩人。1910年東京美術学校入学。14年藤森静雄、田中恭吉と同人誌『月映』を刊行。31年日本版画協会の創立に参加。51年第1回サンパウロ・ビエンナーレに出品。53年岡本太郎らとアートクラブ結成。東京で没、63歳。

谷中安規 《画想》

漆黒の闇、蠟燭の灯りをたよりに黙々と版を刻む姿がいと美しい

谷中安規は不思議な作家である。彼の実生活は極貧のなかにあったが、かえって自由に生きていた。挿絵の代金をもらえば、タクシーで好きなコーヒーを飲みに行き、お金を使い切るような奇行は山ほどあるようだ。内田百閒や佐藤春夫らの文人に「風船画伯」として愛され、装幀や挿画で『王様の背中』や『FOU』などの優れたコラボ作品を残している。一方、芸術には全身全霊で立ち向かい、彼の夢想や愛を木版に刻み続け、心ゆたかな世界を描きだした。このギャップが彼の作品の魅力の一つになっているように思う。彼は終戦の翌年、焼け野原で栄養失調で亡くなった。

出品作品との出会いは偶然だった。四年前のヤフーオークションである。図柄に惹かれ、「怪しげな作品だな」と思いながら、落札した。作品が届き、調べてみると、額の裏には南天子画廊のシールが付いており、谷中安規作となっていた。谷中が再評価されるきっかけになった一九六六年の南天子画廊の出品作品かもしれない。また、黒一色は油性インクを使ったためと判明。一九三二ごろの作品に同じ技法の作品がある。この作品は谷中本人が暗闇のなかで、蠟燭の灯りをたよりに、夢想のなか、黙々と版画制作に打ち込む姿が描かれており、それも油性インク摺りとなる珍品で貴重な作品かもと密かに思っている。

荒井由泰（福井県勝山市）

谷中安規 《画想》

木版（油性インク）・紙 16.0×12.5cm 1932年頃

Taninaka Yasunori Pictorial Ideas



谷中安規（たになか・やすのり／1897 - 1946年）

奈良県生れ。木版画家。永瀬義郎著『版画を作る人』から影響を受ける。1931年日本版画協会の結成に参加。32年版画誌『白と黒』『版芸術』の同人となり、幻想的な画風や都会の情景をとらえた作品を発表。終戦の翌年、東京で没、49歳。

松村綾子 《紫陽花》

「綾子さん、はじめまして」

松村綾子さんの作品と出会うことが出来ました。

「絵との出会いは人との出会い」と思っていますのでこの絵に向かって「綾子さん、はじめまして」とご挨拶させてもらいます。松村綾子さんは星野画廊の星野桂三さんの著書『石を磨く』に掲載された〈悲運の画家、その隠された物語「薫風」〉で知りました。「星野さんはすごい方だなあ」といつも思っています。星野さんの美への卓越した眼力と探求の情熱がこの作品との出会いを繋いでくださったと思います。

田中佐一郎との愛児を亡くし生涯孤独な綾子さん、その終焉は余りにも悲しい。でも、この作品には暗い悲しみは見当りません。

紫陽花は明るく、生き生きとした瑞々しい色彩に満ち、背景のリズミカルで、モダンなダイヤ形も花と共に咲いているようです。

テールブルクロスの赤、緑、黄が一層紫陽花を爽やかにしています。

綾子さんの悲しみを乗り越え、絵への熱い思いが作品に現れているものと感じます。

「綾子さん、これからよろしくお付き合いください」

西澤賢史（長野県千曲市）

松村綾子 《紫陽花》

油彩・キャンバス 38.0 × 45.4cm 1960 - 73年頃

Matsumura Ayako Hydrangeas



松村綾子（まつむら・あやこ／1906 - 1983年）

仙台生れ。関西美術院で都鳥英喜、黒田重太郎に師事。1937年二科展特待。40年二科会会友。紀元2600年奉祝美術展に出品。62年京都市展で受賞。その後、京都市展委員を務める。83年京都で没、77歳。

万羽 章 《1950年夏の女（仮題）》

棄てられた？絵が生きかえった

綿埃と泥まみれの汚れていた一枚の絵、一部剥落、ひび割れも入っている。長い間放置されていたのだろう。最悪の状態のわりには絵そのものが発する熱のような、魅かれるものがあった。長野市の競市で夏目漱石の紙幣一枚で買った。

上半身は白いシミーズなのかブラジャーなのか？ 肩も、胸元も露出して裸足で派手目なスカートで大腿にどっかと腰をおろして下向いている。流行であろうパーマネントの髪形、開け放された部屋の外は草も木も真夏のお世返るような暑さだ。

昭和二五年、戦後五年目の八月の絵である。よく見るとキャンバスではなく、幾条かの縦の折柄が絵の具の下から浮き出ている。シートかカーテンの布地だろう。生地の裏側には薄い布に安定性と厚みを加えるためだろうか和紙を貼ってある。

物の不足な時代、こんなにまでして画布を作りこの絵を描いたのだ。

万羽章は戦地から生還してこの年二九歳、長野で教鞭をとっている。

戦後食うや食わずの暮らしは女性にとって体を張った仕事も想像出来る。若き教師の目には逞しく生きている日本の夏の女を描き上げたかったに違いない。画家の思いが絵から伝わるだけにじっと作品を見つめることの大切さを思い起こした。

棄てられたとも言える魅力いっぱい絵、汚れを取り、額装し直した。描かれた女性も画家も生きかえった気がする。

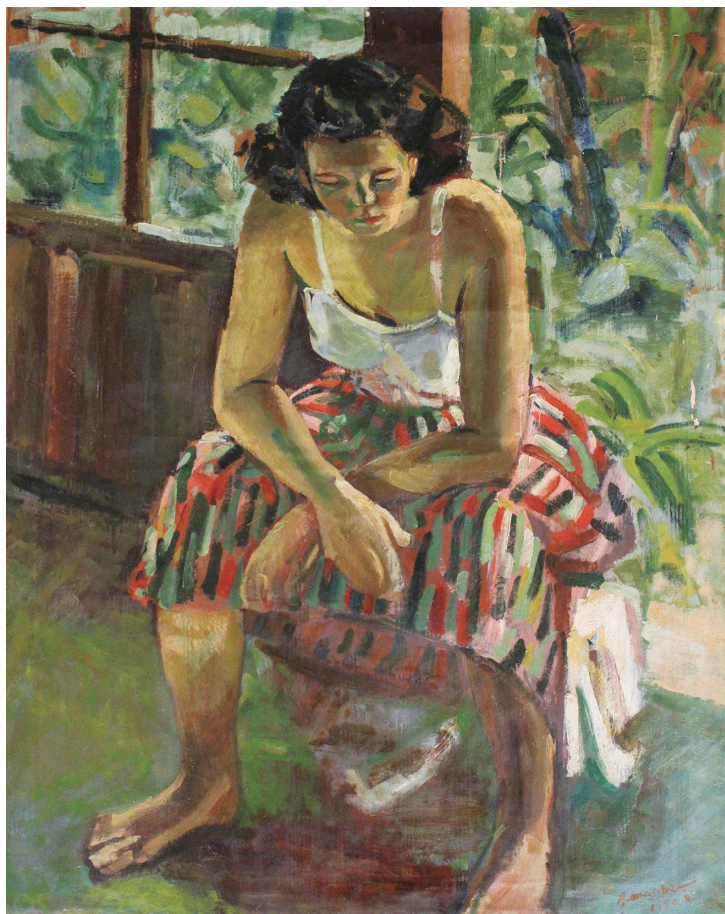
素直にうれしくなった。

西澤賢史（長野県千曲市）

万羽 章 《1950年夏の女（仮題）》

油彩・綿布 90.0×72.0cm 1950年

Manba Akira A Woman in the Summer of 1950 (Tentative Title)



万羽 章（まんば・あきら／1921－1991年）

長野市生れ。篠原新三、辻村八五郎に師事。中学校などで教員をしながら光風会、日展に出品。1961年光風会会員。長野市で没、70歳。

篠原新三 《収穫（仮題）》

初めて出会った水彩画家の油絵

篠原新三は長野市出身の水彩画家であり、多くの水彩画は見てきたが、油彩画はこの絵が初めてだ。

画面左下に S. Shinohara 1911 のサイン、裏をじっくり見ると鉛筆で「明治四十四年 篠原新三」と縦書きが読み取れる。経年による汚れ、ヤケが残念だが絵全体を壊す程ではない。稲の収穫風景が丁寧な筆致で描かれ、秋空や五段のハゼ掛けの水面に映るさまを実直に写し取っている。油彩でありながら水彩画の透明感も感じられる。日本水彩画研究所で丸山晚霞、大下藤次郎等に教えを受け、確かな描写力をつけていたことがわかる。

この絵は山に囲まれている信州の田園風景ではないと思う。信越県境の山を越えれば米どころ越後、ハゼ掛け用の木が田の畔にある上越地方の風景は見覚えがある。明治二十一年には関山駅ー長野駅間が開通しており越境しての制作かもしれない。

因みに現在の長野駅は篠原家の所有する土地を提供して作られたものだそうだ。

この油彩画は明治期最後の作であり、大正・昭和と水彩画家として大いに活躍した篠原としては希少作品とも言える。

今後も篠原の油彩画に会えることを期待したい。

西澤賢史（長野県千曲市）

篠原新三 《収穫（仮題）》
油彩・キャンバス 45.5 × 60.6cm 1911年
Shinohara Shinzo Harvest (Tentative Title)



篠原新三（しのはら・しんぞう／1889－1966年）

長野市生れ。1909年日本水彩画研究所に入所、丸山晚霞、大下藤次郎に学ぶ。13年日本水彩画会創設に発起人として参加。南薫造、石井柏亭に師事。47年日展委員。日本水彩画会名誉会員。北信美術会顧問。長野で没、76歳。

長谷川潔 《花》

白昼に神を視る

掲載の作品は、私が長谷川潔を三五年程前に知って、やっとその作品の素晴らしさが分かってきた一五年程前、私の前に現れたのでした。一九四五年、第二次世界大戦終戦の年、フランスで困難な生活を強いられていた長谷川潔にフランスを代表する銅版画家六名の作品集制作の話がもたらされます。その画集はダブルスイート（一点は版上サインのみ、他の一点は自筆サイン、エディション入り）の贅沢なものでした。

これを私が買うことが出来たのは、フランスの作家は二点揃っていましたが、長谷川潔の作品《花》は版上サインのもの一点だけの為でした。しかし不思議な事に他の作家の二点を見比べてみると、版上サインの方がどれも版の仕事が進んでいて明らかに完成度が高いのです。このあたりの事情を誰か教えて頂ければ幸いです。そしてこのアクアチントでレースが転写され、春の草花が切り子グラスに生けられた作品は長谷川潔の言葉「白昼に神を視る」をそのまま作品にした如く、その技術は熟練を極め、高邁な精神を表現して見る者の目と心を釘付けにするのです。作者五四歳、まさに脂の乗り切った時代の代表作です。以降、長谷川潔はその代名詞であるマニエール・ノワール（幽玄の白と黒の世界）の深化と完成への道をひたすら歩むのです。勿論、他の銅版画の技法でも日本が世界に誇りうる作品を残しています。

一九八〇年、京都国立近代美術館で回顧展が開かれた年、日本へ一度も帰ること無くフランスで八九歳の生涯を閉じたのです。

万物に神宿りいる白昼の路 まんぶく

福田豊万（千葉県市川市）

長谷川潔 《花》

銅版画（アクアチント）・紙 25.0×18.0cm 1945年

Hasegawa Kiyoshi Flowers



長谷川潔（はせがわ・きよし／1891－1980年）

横浜市生れ。1913年板目木版画、銅版画を制作。18年渡仏。マニエール・ノワールを復興する。31年日本版画協会創立会員。66年フランス文化勲章を受章。80年京都国立近代美術館で回顧展。パリで没、89歳。

山口長男 《富士山麓》

時代が山口作品に追いついてきた

富士の山麓を描いており、富士山は描かれていない。木々のみどりなどの自然を写し、油絵でさっと描いているように見えるが、無駄がなく、絵の具のこなし方がうまい。黒の地色の上には黄土色または赤茶色の絵の具がかなり厚塗りされた作品を描いていたこの時期の山口としては、めずらしい構図である。私は山口長男の水彩・墨跡作品に魅かれるが、本作油絵も見飽きない。日本における抽象絵画の歴史は、昭和一〇（一九三五）年頃に遡るが、山口は明治三五年生まれで、昭和一〇年ごろにはいち早く抽象志向の作品を発表している。

本作が描かれた昭和二九（一九五四）年には、山口は五一歳。ニューヨークでの第一八回アメリカ抽象美術展に出品、武蔵野美術学校教授に就任し、春季二科展には《作品A》《作品B》を出品、第一回現代日本美術展には《作品（かたち）》を出品し優秀賞を受賞、秋の二科展にも《二つの形》等を出品している。円熟期を迎え始めた山口である。同年『美術手帖』（No.86）一〇月号には、作家訪問記事（文・山崎清 写真・土門拳）も掲載されている。しかし当時の日本で、山口の作品が理解されていたとは必ずしも言えない。

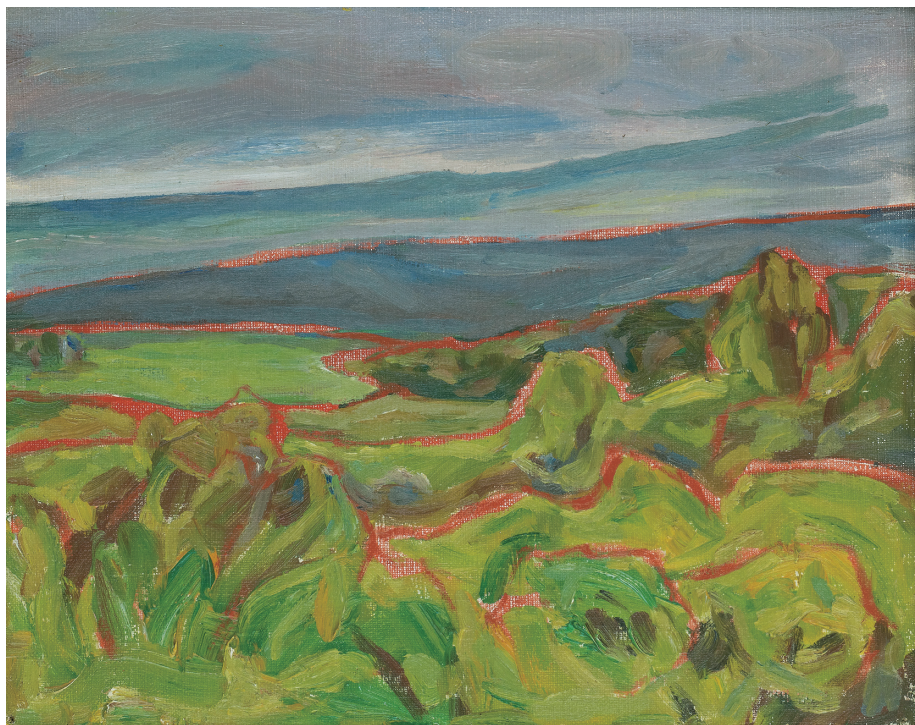
最近アメリカのオークションで落札された《作品》（一九五三年）などの、魅力的な造形作品の評価は著しく高い。

二〇一六年二月八日 中村 徹（神奈川県川崎市）

山口長男 《富士山麓》

油彩・キャンバス 22.0 × 25.5cm 1954年

Yamaguchi Takeo *The Foothills of Mt. Fuji*



山口長男（やまぐち・たけお／1902 - 1983年）

ソウル生れ。1927年東京美術学校西洋画科卒。27 - 31年渡仏。38年九室会結成。45年二科会会員。54 - 74年武蔵野美術学校／大学教授。武蔵野美術学園長を務める。62年芸術選奨文部大臣賞を受賞。東京で没、80歳。

安藤義茂 《白いリボンの少女》

内的な心象表現

安藤の名前は、徳島県立徳島中学校勤務時代の教え子に画家伊原宇三郎がいたことで知っていたが、作品を初めてみたのは、「私の愛する一点展」(二〇〇一年、北御牧村立〔現・東御市〕梅野記念絵画館) 会場である。

粗末に見える紙に、凛とした少女の姿を描き、目の表情には凄味があるわけではないが、目の輝きがある。作者は並の者ではない。紙の裏に二〇、二一、一五の記載がある。昭和二〇年作であろうか。そうだとすれば、敗戦の半年前、戦争中に描かれており、「キッと未来を見透かすようなひとみ」(本作の旧蔵者内田久氏の評) である。

安藤が一九四三年から始めた刀画は、彩色を施した紙の表面を刀で削ることで独特のマティエールを得る技法である。

伊原の教え子のひとりには、近年再評価が高まっている画家牧野邦夫である。安藤↓伊原↓牧野作品を並べてみると、そこには日本の油絵の歴史の中で、写実の確かなひとつの流れが見えてくる。画面の現れ方は異なっても、「内的な心象表現」(日動画廊『繪』(二九六号、昭和六三年一〇月) 安藤特集記事の副題) といってもよいであろう。三人とも技量に優れ、安藤の力量は次世代に伝えられている。

安藤の展覧会は、没後何回か各地の美術館で開かれた。今後美術館で、安藤・伊原・牧野の三人展が開催されることを期待したい。

二〇一六年一月 中村 徹(神奈川県川崎市)

安藤義茂 《白いリボンの少女》

刀画・紙 27.0 × 21.0cm 1945年

Ando Yoshishige A Girl with a White Ribbon



安藤義茂 (あんどう・よししげ / 1888 - 1967年)

愛媛県生れ。1911年東京美術学校師範科卒。中学校教師を務めた後、27年画業に専念。帝展、新文展に出品。二紀グランプリ受賞。43年より刀画を始める。51年二紀会同人。京都で没、78歳。

津高和一 《公園風景》

抽象絵画へ転じる前に描かれる

阪神淡路大震災後の一九九八年日本美術品競売株式会社（J・A・A）の第一五三回オークションで、本作と出会い作者を知る。

くねるような曲線で描かれた一八本の木は、一本一本それぞれの色で描き分けられ、五、六人の人物は達者な線で表わされている。画題は後付けであろうが、一見具象作品にみえるものの画品のある半抽象作品とさえいえる。

津高は、現代美術懇談会（一九五二年創立）に所属した関西の作家である。津高は、一九五一年の第六回行動美術展に出品した《母子像》で脚光を浴び、翌年には線を主体とした独特の抽象絵画へと転じて、その斬新でモダンな画風により高い評価を受けることになる。本作は抽象絵画へ転じる直前に描かれている。

津高と二人展を開いている造形の作家・山口長男作品に魅かれる私は、詩情のある津高の抽象作品も観たいと思った。二〇一六年一〇月にギャラリーゴトウで開催した「中村徹コレクション展／中村傳三郎生誕一〇〇年記念小品展」には、津高作品《錯》（一九八四年）を出品した。二〇一二年ギャラリーゴトウで開催された津高展の出品作で、作家晩期の作品である。微妙な線の重なりと余白の絶妙なバランス、手業のなせる作品である。

私の生まれ年に描かれ資料的価値もある本作と、作品《錯》を見比べ、作家の歩みと時間の変化を感じている。

二〇一六年一月 中村 徹（神奈川県川崎市）

津高和一 《公園風景》

油彩・キャンバス 45.0 × 37.0cm 1951年

Tsutaka Waichi Park View



津高和一（つたか・わいち／1911 - 1995年）

兵庫県西宮生まれ。中之島洋画研究所に通う。1952 - 64年行動美術協会会員。68 - 85年大阪芸術大学教授を務める。67年兵庫県文化賞、86年大阪芸術賞を受賞。西宮で没、83歳。

山下新太郎 《セーヌ河》

ルノアールを日本に紹介した画家

山下新太郎は、第一回の渡仏中にルノアールのアトリエを訪問し、作品を直接購入するなどルノアールと親交を深めた画家である。このため、山下新太郎の画風は、ルノアールに影響を受け、自然光による柔らかな色彩を重視したものとなっている。

この《セーヌ河》の絵は、山下新太郎が二回目に渡仏した一九三二年に描かれたものである。支持体はキャンバスではなく、板である。川面は木目が透けて見えるほど薄塗りにし、柔らかな霧囲気を醸し出している。

同時に出品した萩谷巖の《巴里セーヌ川》と見比べて頂きたい。両者は構図がほぼ同じである。しかも制作年も同じである。日本人二人が、セーヌ川の岸边で一緒にイーゼルを立てて同じ風景を描いていたのであろうか、と想像を膨らませている。しかもこの二人の絵には橋の上をパスのような乗り物が描かれている。これも偶然の一致だろうか。

日本にはない大きな石橋は、当時の文明を表すだけでなく、恰好の画題だったのだろう。

太田貞雄（東京都八王子市）

山下新太郎 《セーヌ河》
油彩・板 27.0 × 35.0cm 1932年
Yamashita Shintaro *The Seine*



山下新太郎（やました・しんたろう／1881 - 1966年）

東京生れ。藤島武二に師事。1904年東京美術学校西洋画科選科卒。05 - 10年渡欧。14年二科会創立会員。31、32年再渡欧。35年帝国美術院会員。36年一水会創立会員。55年文化功労者。東京で没、84歳。

萩谷 巖 《巴里セーヌ川》

セーヌ川の流れに魅せられて

私は家の狭い庭にバラを三〇本ほど植えているが、栽培が難しく毎年何本かは枯れてしまう。難しいが故に、美しい花が立派に咲くと嬉しく美しいものである。

萩谷巖のバラはどの絵もバラそのものの美しさを端的に表現している。バラの絵を集めて気が付いたら五枚にもなってしまった。

萩谷のバラはあまりにも有名なもので、今回は萩谷の滞欧作品を出品することにした。一九三二年制作で、萩谷が二回目の渡仏時のものである。

二〇年以上前にオルリー空港からバスでパリ市内の停留所に着き、そこからスーツケースをゴロゴロと引張って大きな川を渡り、「これがセーヌ川か」と感慨に耽ったことを思い出す。誰でもパリに行くとき、先に目に入るのがこの幅広のゆったりとした流れのセーヌ川である。萩谷もパリに着き、セーヌ川とその流れに抗うように立っている立派な石橋に、画家としての興味をそられたのではないだろうか。一九五二年の第三回の渡仏時にも萩谷は同じ構図でセーヌ川を描いている。

太田貞雄（東京都八王子市）

萩谷 巖 《巴里セーヌ川》

油彩・キャンバス 33.5 × 55.0 cm 1932年

Haginoya Iwao *The Seine in Paris*



萩谷 巖（はぎのや・いわお／1891－1979年）

福岡県生れ。1908年白馬会葵橋美術研究所に学ぶ。18－20年光風会展に出品。22年渡仏。シャルル・ゲランに師事。サロン・ドートンヌ会員。再三渡仏。個展を中心に活動する。東京で没、88歳。

鈴木信太郎 《オランダ万才》

願えば叶う、不思議な縁

鈴木信太郎は、私と同じ八王子生まれのため、非常に親近感を覚える画家である。
この絵のタイトルの《オランダ万才》は、長崎の伝統あるお祭りである「オクンチ」に登場し、南蛮風衣装を身に着けて練歩く出し物（舞踊）である。

この絵の購入のきっかけは、一〇年ほど前に八王子市夢美術館に鈴木信太郎展を観に行った時、同じタイトルの《オランダ万才》が掛けてあったことによる。「万才」と云う以上相手の絵も一緒に掛けていないことに違和感を覚えていた。相手であるもう一つの絵はどこに行ったのか。可能であれば見つけてみたいと思っていた。

それから数年経って、オークションに相手の絵が出品されていた。落札したことは言うまでもない。「願えば叶う」ではないが、不思議な縁を感じる。

この絵は、鈴木信太郎の風景の絵とは趣を異にしているため不安もあり、東京美術倶楽部に鑑定に出した。幸い真作との鑑定書が発行されている。

太田貞雄（東京都八王子市）

鈴木信太郎 《オランダ万才》

油彩・キャンバス 60.7×41.0cm 1949年頃

Suzuki Shintaro *An Oranda Manzai Dancer at Nagasaki Kunchi Festival*



鈴木信太郎（すずき・しんたろう／1895－1989年）

東京八王子生れ。白馬会溜池洋画研究所で学ぶ。1916年文展に初入選。26年二科会展樽牛賞。36－54年二科会会員。55年一陽会を結成。60年日本芸術院賞を受賞。69年日本芸術院会員。東京で没、93歳。

須田 寿 《群牛》

懐かしい記憶の一ページ

須田寿は「牛」の絵で有名である。

この絵を見るといつも思い出すことがある。

カナディアンロッキーを家族で旅行に行った時のこと、朝早く起きてバッファローパドックに野生のバッファローを見に行った。クリスマスシーズンのため見物客もおらず、動物もいない。帰ろうとしたところ、一頭の大きなバッファローが林の中でこちらを見ている。凄味のある野生の眼で警戒しているようであったが、次の瞬間後ろを向き林の中に消えていった。それは一瞬の出来事であった。

その時の凄味のある姿をこの絵からも垣間見ることがができる。牛とバッファローでは違うが、懐かしい記憶の一ページである。

帰り道で、ハイエナにも出くわしたが、そのまま車は止まらずに素通りしてしまった。

太田貞雄（東京都八王子市）

須田 寿 《群牛》

油彩・キャンバス 73.0×91.0cm 1962年

Suda Hisashi A Group of Cows



須田 寿（すだ・ひさし／1906－2005年）

東京生れ。31年東京美術学校西洋画科卒。官展に出品。49年立軌会創立に参加。54年渡欧。65年武蔵野美術大学教授。85年芸術選奨文部大臣賞を受賞。東京で没、98歳。

大久保作次郎 《江の島待春》

希望を持たせてくれる絵

大久保作次郎は、東京美術学校で黒田清輝に学び、その影響により風景画は太陽の光をふんだんに浴びた明るく、和やかな作風となっている。

この絵の「江の島」は、関東大震災による地殻変動で陸地との間が陥没し、絵の中にあるように現在では橋で繋がっている。私が小学生や中学生の時に良く行ったものであるが、この絵の制作年の一九五九年と景色は変わっていないように思う。

また、この絵はなんと明るい色彩に満ちているのか。色とりどりの色彩は、どことなく明るい将来を予見させ、見るものを前向きな姿勢にさせ、また落ち着いた気分にもさせてくれる。我が家の玄関で来客を迎えるに恰好の絵であり、外光派の流れを受け継ぐ大久保作次郎ならではの素晴らしい絵である。

太田貞雄（東京都八王子市）

大久保作次郎 《江の島待春》

油彩・キャンバス 61.0×73.0cm 1959年

Okubo Sakujiro *Waiting for Spring in Enoshima Island*



大久保作次郎（おおくぼ・さくじろう／1890－1973年）

大阪市生れ。1915年東京美術学校西洋画科卒。16、17、18年文展で連続特選。38年槐樹社会員。39年創元会創立会員。55年新世紀美術協会創立会員。60年日本芸術院賞を受賞。63年日本芸術院会員。東京で没、82歳。

鶴田吾郎 《層雲峽》

山岳画家。そして中村彝

この絵はある画廊で何年か前に目が留まり、聞くと鶴田吾郎の作とのこと。
わずかな私の知識でも鶴田吾郎は中村彝つねの親友で、現在は東京国立近代美術館にある盲目の
エロシエンコの像は鶴田が目白駅で盲目の詩人エロシエンコ氏に会いモデルになってくれるよ
う頼んで鶴田と中村二人で左右から競作したもので、鶴田の作品は新宿の中村屋サロン美術館
にあります。

そんなことを思い出しながら裏を見ると鶴田自身が北海道の知人宛に書いた手紙とその方に
届いた鶴田の死亡通知がありました。鶴田は北海道で各所の山の絵を描いた記録もあり、宛名
の方から出てきた作品と思われます。国立公園シリーズ三〇点もあり日本山林美術協会も設立
しています。

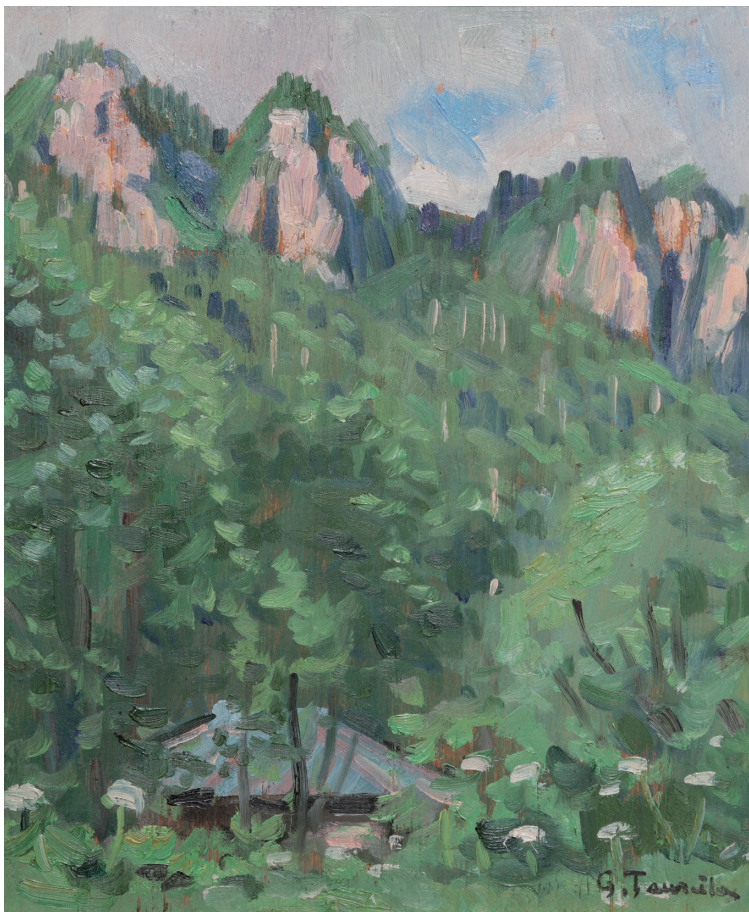
この作品は層雲峽をさらっと描いたものですが何か私の眼を和ませてくださいました。
ご存知のように鶴田と中村は戦前の中村屋サロンで友人でした。

中井嘉文（東京都練馬区）

鶴田吾郎 《層雲峽》

油彩・板 30.0×24.0 cm 制作年不祥

Tsuruta Goro *Soun-kyo Gorge*



鶴田吾郎（つるた・ごろう／1890－1969年）

東京生れ。1906年白馬会洋画研究所に通い、中村彝らと親交。20年エロシエンコ像が帝展に入選。25年太平洋美術学校教授。30年渡欧。従軍画家。アカデミー46美術研究所を開設。示現会創立会員。東京で没、78歳。

大貫松三 《柿と栗》

湘南の画家

大貫松三氏の絵と出会ったのは或百貨店の著名なフレンチレストランでのことです。ギャラリーと言っているほど壁にとても良い具合に絵が掛けられていて、その多くは今回の絵と同じ霧囲気の静物画でした。

一寸変わった霧囲気の婦人像もありました。

従業員の方に絵の作者を尋ねると、当店のオーナーシェフの父上の作品とのことで、それからちよつと調べると大貫松三氏の名前が出てきました。私も家の居間に掛けるのにちよつど良い霧囲気の絵と思い一点手に入れました。

柿と栗という日本の秋を代表するものを静かなバックに描いています。平塚に縁のある方で平塚市美術館でも大貫松三展が開かれたこともあります。湘南地方を代表する画家として「湘南の画家」とも呼ばれています。

中井嘉文（東京都練馬区）

大貫松三 《柿と栗》

油彩・板 23.0×33.0cm 制作年不詳

Onuki Matsuzo *A Persimmon and Chestnuts*



大貫松三（おおぬき・まつぞう／1905－1982年）

神奈川県生れ。1931年東京美術学校西洋画科卒。37、38年新文展で連続特選。41－49年創元会に出品。49年立軌会創立会員。後に無所属となる。川崎で没、76歳。

桜井浜江 《花瓶》

炎たつ女流画家

この画もある画廊でふと目について購入したものです。背景はともかく、花瓶の勢いある心のこもった筆のタッチ、女性とは思えぬ色の重ね具合、一寸押され気味でした。

H・Sのサインから桜井浜江の作品と分かりました。余談ですがわの会の会の放談会にこの画を持って行ったところ事務局長の堀さんも同じ作者の画をお持ちになり、偶然ですが驚いた思い出があります。

作者は山形市生まれで結婚を勧める親の反対を押し切って上京、フォービズム運動の中心人物の里見勝蔵の指導を受けます。里見の率いる独立美術協会と、後に三岸節子らと結成した女流画家協会を舞台として意欲的な作品を描き続けました。作家志望の夫秋沢三郎との関係で太宰治、壇一雄らと交流がありました。

第一回から出品をつづけた桜井がやっと独立美術協会で会員になれたのは第二二回展のことでした。

中井嘉文(東京都練馬区)

桜井浜江 《花瓶》

油彩・キャンバス 43.0 × 36.0cm 制作年不詳

Sakurai Hamae A Flower Vase



桜井浜江 (さくらい・はまえ / 1908 - 2007年)

山形市生れ。1928年「一九三〇年協会」の洋画研究所で学ぶ。里見勝蔵に師事。47年女流画家協会を設立。48年独立賞。54年独立美術協会会員。79年山形美術博物館、95年青梅市立美術館で個展。東京で没、98歳。

森

芳雄 《母子像》

柔らかい光に包まれた母子像

森芳雄さんの一番得意とする母子像で柔らかい、温かそうな光に包まれた若い母子像で毎日見ている心をやませてもらっています。
不勉強で森さんのことは詳しくは存じ上げないのですが、これに似た雰囲気絵が多いように伺っております。
児童書の挿絵を多く手掛けていらっしゃるということからも想像できます。
兎に角毎日見ていると全く飽きません。

中井嘉文（東京都練馬区）

森 芳雄 《母子像》

油彩・キャンバス 40.0 × 31.0cm 制作年不詳

Mori Yoshio *Mother and Child*



森 芳雄（もり・よしお／1908 - 1997年）

東京生れ。本郷絵画研究所、「一九三〇年協会」の洋画研究所に通う。31 - 34年パリに游学。39年自由美術家協会会員。57年武蔵野美術大学教授。64年主体美術協会結成に参加。東京で没、89歳。

寺田政明 《むくげ》

池袋モンパルナスの画家 寺田農^{みのり}の父

いわゆる池袋モンパルナスは小川が流れ湿地帯であったような現在の要町付近から椎名町、東長崎、落合、また北の板橋方面にまで広がったアトリエ村の事で、若手芸術家が多く住んでいたことで知られています。

池袋モンパルナスとは小熊秀雄が名づけたが寺田はその若手芸術家の中心人物の一人であり、また日本におけるシュルレアリスムの代表者の一人でもあります。

画風は何回か変わっていてシュウルのものもそれでない一般的なものもあります。今回の《むくげ》はその画面の色の美しさ、マチエールの良さで購入したものです。

私の中学の同級生にもモンパルナスの画家がいて何か懐かしい響きがあります。

個展でもご子息の寺田農さんを御見掛けしてお話ししたこともあります。寺田さんの彩色版画三点も我が家の壁面を飾っております。

中井嘉文（東京都練馬区）

寺田政明 《むくげ》

油彩・キャンバス 40.0×54.0cm 制作年不詳

Terada Masaaki *Roses of Sharon*



寺田政明（てらだ・まさあき／1912－1989年）

福岡県八幡生まれ。太平洋美術学校で学ぶ。独立展、NOVA展に出品。1936年エコール・ド・東京結成。37年独立美術協会賞。39－49年美術文化協会結成。43年新人画会結成。50－64年自由美術家協会会員。64年主体美術協会結成。東京で没、77歳。

今井ロヂン 《バラと花瓶》

今井ロヂンと藤田嗣治・隣のおじさん

今井さんのアトリエと私の家とは裏隣の関係にあります。練馬アトリエ村の主と言ってもよい方でした。今もご遺族の方がお住みです。体の大きい優しい方でした。奥様の喜久子さんはピアノ教師で今井さんのお世話をよくしておられました。今井さんを語るには藤田嗣治との関係を見逃せません。戦後江古田小竹町に住んでいた藤田が自転車で行き来して、前から弟子だった今井さんを一年貸してくれと頼みました。奥さんの喜久子さんはどうぞと快諾しました。それから藤田がアメリカ経由でフランスに帰るまで真面目にお手伝いをされたようです。今井の絵は細い面相筆を使うなど藤田に似ているところもありますが、モチーフ、輪郭のとりかたその他苦労して今井色を出しており、特にバラと花瓶の絵は今井のバラとして知られています。またアメリカの田舎風景、猫の絵も有名です。

中井嘉文（東京都練馬区）

今井ロヂン 《バラと花瓶》

油彩・キャンバス 40.0 × 31.0cm 制作年不詳

Imai Rojin A Vase with Roses



今井ロヂン（いまい・ろぢん／1909－1994年）

満州生れ。太平洋美術学校本科油絵科修了。1941－49年藤田嗣治に師事。中央公論社画廊、スルガ台画廊で個展。70年二科会会員。75年二科会員努力賞。94年没、85歳。